

5歳児実践事例

「タイムを可視化し、繰り返し走る中で意欲が高まっていった事例」

男児2名 女児1名 計3名

1 子どもの実態

年中児1名（A児）、年長児3名（B児、C児、D児）、合計4名で生活を共にしていることで、学年の枠を超えて気軽に関わっている。運動会に向かう生活の中で、個人と4人合計（リレー式）のタイムレースという形でかけっこに取り組んだ。毎日の記録を（紙の長さで）可視化し、意欲を引き出していく中で、「明日はもっと速く走りたい」という意欲が徐々に高まっていった。そして、自分なりの目標をもって、登園するとどの子も自ら遊戯室へ行き、繰り返し走ることを楽しんでいった。

一人一人のタイムは速くなっていき、自信がついてきた一方で、4人合計の記録は縮まらずに「明日こそ記録更新ができるか」と頑張ろうとする姿が伺えた。その中で、B児は4人の中でも足が速く、いろいろなことを知っていることで、タイムが速くなるために自分なりに気付いたことや考えを教師に表すことが多かった。

2 教師の願い

友達の良いところを取り入れたり、友達と気持ちを合わせたりしながら、目的に向かって一緒に走ることを楽しんでほしい。

B児については、自信をもって自分の知っていることや考えを友達に伝え、繰り返し友達と一緒に走ることを楽しんでほしい。

3 保育の実際

幼児の姿と教師の援助	教師の援助	教師の援助の意図・考察
<p>9月20日</p> <p>登園した子から遊戯室で走り始めている。教師も一緒に走ったり、応援したりする。タイムを計ると、一人一人のタイムは更新したが、4人のタイムは更新できなかった。そこで①教師は子どもたちとタブレットで撮影した4人が走る姿を見返すことにした。子どもたちは「手を振って走ったんだよ。」と意識していたことを話す。B児はタブレットをじっと見ている。</p> <p>②教師はB児が走るシーンを見た後に、「タイムが速いけど、B児さんは走るコツがあるの。」と問い掛ける。B児は少し考えてから「コーンを曲がる時に、体を斜めにしてるんだよ。」と答える。他の子は「え、どういうこと。」と、十分理解していない表情をしている。③教師は「B児さん、やって見せてくれる。みんなも知りたいよね。」と言葉を掛けると、他の子どもたちも「うん。教えて。」と興味を示す。B児は、「うん、いいよ。」と三角コーンがあるところに行き、B児「まず走って行って、曲がる時に、体をこっち（三角コーン側）に斜めにするんだよ。」と生き生きと話す。C児とD児は少し驚いた表情をしたが、すぐに笑ってB男の動きを取り入れて走り出すと、A児も一緒になって走る。A児、C児、D児は「こういう感じ。」と、三角コーンを回りながらB児に聞く。B児は「そうだよ。」「もっと（カーブを）」</p>		<p>① タブレットを使うことで、客観的に友達や自分の走る姿を見たり、良いところに気付いたりしてほしいと考えた。</p> <p>② じっと見るB児の姿から、B児は自分自身の走りを振り返っていると捉えた。B児が友達に走るコツを話すことで、自信をもつきっかけになってほしいと考えた。また、他の子どもたちはB児の良さを知り、友達の方法を取り入れたいと思うきっかけになればと考えた。</p> <p>③ 子どもの様子から実際に動きながら話した方が友達にも伝わりやすく、B児も話しやすいのではないかと考えた。</p> <p>④ 子どもたちがB児の方法を取り入れたことで、速く走られるようになっていくことを感じた</p>

小さくね。」などと自分から答えたり、張り切って走って見せたりしながら一緒に走ることを繰り返し楽しんだ。④教師は「みんなのコーナーの曲がり方が速くなっているよ。B児さんの方法ってすごいね。新記録が出そうだね。」とみんなが聞こえるように声を掛け、一緒に走る。その後、「いい感じだね。」「次は4人の新記録が出るかな。」と4人で楽しみにする姿があった。

9月27日

前日はあと少しで新記録が出なかったが、「今日こそは」という思いをどの子どもも持っている様子が見られた。C児「今日こそ新記録出るかも。」A児「私、斜めに走っているよ。」と、登園した友達に声を掛けたり、B児から聞いたことを意識して走ったりしている。

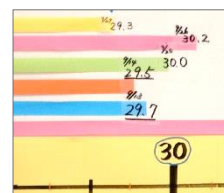


4人でタイムレースをした後、⑤この日も教師はタイムを紙テープの長さで示し、みんなでタイムを見る。新記録が出たとたん、どの子ども「やったー。」「こんなに速くなった。」と飛び上がり、教師も一緒に喜び合う。B児も手を挙げて喜んでいる。

⑥教師は「どうして昨日より速くなったんだろう。」と子どもたちに問い掛ける。C児が「バトンを渡すときに、手をいっぱい伸ばしたんだよ。」と話す。B児も共感しながら「うん。そうだよね。早くもらえるから。」C児「そう。」と話す。⑦教師「コーナーを斜めに走っただけじゃなくて、友達とのバトンの渡し方もらい方も大事だったんだね。だから今日は新記録が出たんだ。」と子どもたちが頑張ったことを十分認めた。子どもたちは「そう。よし、またやってみよう。」と4人で走り出した。

り、次のタイムレースへの意欲を膨らませたりしてほしいと考えた。また、B児には、友達がB児の方法を取り入れているうれしさを感じてほしいと考えた。

⑤ タイム（時間）が速くなったことが分かりやすいように、タイムの長さを紙テープで可視化してきた。毎日タイムの比較ができることで子どもの期待を大いに膨らませることができた。



⑥ 記録を見ながら子どもたちと振り返る機会を設けることで、自分たちが頑張ったことや友達と一緒に取り組んでいることを意識化できるように考えた。

⑦ 自分一人が頑張ったことだけでなく、友達を意識してバトンを受け渡したことを十分認めることで、友達と目的に向かって頑張る楽しさやさらに次への意欲をもってほしいと考えた。

4 考察

○ 「A児、C児、D児がB児のよいところを取り入れて走ろうとした姿」を、人（友達）やこと（走ること）への関わりが深まった姿だと捉えた。どの子ども「明日は4人の新記録を出したい（速く走りたい）」という、共通の目的があったからこそ、B児の良いところを意欲的に取り入れて、友達と繰り返し走ることを楽しむ姿につながったと考える。

子どもが毎日のタイムを比較できるように、その都度、遊戯室の大きな壁面にタイムを紙テープの長さで示して、可視化をしていった（⑤）。タイム差が見て分かりやすい、自分たちが速く走れるようになっているうれしさを実感できる、「次も新記録を出したい」という意欲や共通の目的をもち続けることができる、振り返ることができるなどから、タイムを可視化した環境構成は有効であった。

○ 「B児が走るコツを友達に自信をもって伝え、繰り返し友達と走ることを楽しむ姿」が、B児にとって人（友達）やこと（走ること）への関わりが深まった姿であると捉えた。

B児は友達に走るコツを話したことをきっかけに、友達が自分の走り方を取り入れるうれしさを感じたことが、その後、徐々に自分から友達に関わったり、C児のバトンの話のときにも共感したりする姿につながったと考える。人・もの・ことへの関わりを深めていくために、子どもが自信をもてるような援助やきっかけづくりが有効であったと考える。

○ 人・もの・ことへの関わりが広がったり、深まったりするためには、まず子どもが「もっと～したい」という意欲を膨らませることが重要であると考えた。タイムレースを取り入れたことは初めての試みであった。少人数の異年齢保育の中で子どもが意欲を高め、主体的に活動できるような教育活動や教師の援助・環境構成について、今後もさらに試行錯誤しながら工夫していきたい。